

第55回人間科学セミナー

日時：2022年10月13日(木)13:00～15:00

場所：ラーニングコモンズ+Zoom

災間の災害復興をかんがえる

講演者：宮本匠 准教授
(共生行動論)

災害が、頻発化、激甚化、広域化する中、もはや私たちは「平時」と「非常時」を区別することができないような、常に災害の「間」(なか)にある社会に生きている。同時に、日本社会は、この「災間(さいかん)の時代」を、人口減少、高齢化、経済の停滞、衰退と、右肩下がりの状況で迎えざるを得ない。このように、右肩下がりで、既存の社会資源が目減りしていく中で、眼前の課題がどんどん大きなものに膨らんでいくときには、仮に何をすべきかが明らかであっても、一筋縄では問題が解決しないような、独特な態度を人々にもたらすのではないだろうか。このとき、私たちは、その問題をどのように解決すべきかという「問題解決」に関心を向けるだけではなく、その問題にむきあう主体がいかに存在しうるかという「主体形成」にも関心を払わなければならない。「災間の時代」かつ「右肩下がりの時代」というこの社会の未来を生き抜く術を災害復興を事例に考える。

健康と伝統的食習慣：

カンボジアにおける淡水魚生食とフグ食の実態

講演者：太田貴大 准教授
(コンフリクトと共生)

食は健康の源であるが、食によって健康を損なうこともある。また、健康のために伝統的な食習慣の変容が必要であっても、それを実現することは容易ではない。東北タイ、ラオスやカンボジアのメコン川流域では、コイ科の淡水魚を生食する伝統的な食習慣がみられる。淡水魚生食は寄生虫感染につながるため、様々な対策が実施されてきたが、この食習慣を変えるには至っていない。前半では、カンボジアにおけるこの食習慣の実態を、食物新奇性恐怖尺度(FOOD NEOPHOBIA SCALE)を指標にして明らかにする。また同地域では、有毒の淡水フグを食する習慣がみられ、健康被害が報告されている。淡水魚生食による寄生虫感染の健康影響に比べて、フグ毒の影響は短期間で現れる。後半では、同地域でのフグ食の実態と意識調査の結果を示す。最後に、調査結果を踏まえて、健康に生きることと伝統的食習慣を享受することとの間での「折り合いの付け方」について議論したい。



オンライン
の場合は、
お申込みが
必要です→

